



No. 164

ティークレイク

## Tea Break

童謡唱歌の碑を訪ねて

会員 三宅 正夫

「夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘がなる…」等、昔懐かしい歌の碑を訪ねて見よう。其処に立つと、歌詩と風景とが重なり合って、雰囲気の中にドブプリ浸かってしまうこともある。

### 1. 夕焼小焼

小学校教師であった作詞者、中村雨紅が八王子から実家に帰る約四里の道程をバスもなく徒歩で戻ったときの夕暮れが動機に。詞の「山のお寺」を廻って、その昔近所の寺の間で「当寺である」とあると争いがあったが、作詞当時（1919頃）作詞者の歩く道々、或は近く或は遠く打出される数々の鐘の音が彼の耳に届いたことだろう。

歌碑は宝生寺と宮尾神社とにある。前者は八王子駅より直線で略7キロ北西方向の「宝生寺団地」という丘の麓、後者は更に陣馬山えの街道（陣馬街道）を西方向約6.5キロ先、「夕やけ小やけ」バス停の上。神社に碑があるのは中村氏が当該神社の神官の息であったからとか。

### 2. 鳩ぼっぼ

“鳩ぼっぼ 鳩ぼっぼ ポッポ ポッポと飛んで来い…”

東くめ女史が観音様の境内で鳩とたわむれている子供の愛らしい姿をそのまま歌によまれたもの。人口に膾炙している「ポッポポッポ 鳩ポッポ 豆がほしいかそらやるぞ…」という文部省唱歌は上記の東女史の詩を焼き直したものではないかと言われている。2組の鳩の番いが止った碑は浅草寺本堂に向って左前に建つ。

### 3. かなりや

“唄を忘れた金糸雀は 後の山に棄てましょか…”

大正7年秋西条八十が枯葉散る上野の山の東照宮の辺りを逍遙しているうちに作詩された。碑は上野不忍池、弁天堂を背に上野公園に向って、「櫻木亭」（茶店）の右側に建っていたが、平成27年4月、池辺整備のため何処かへ移転。いづれ復帰されると思われる。

### 4. 十五夜お月さん

“十五夜お月さん 御機嫌さん 婆やお暇をとりました…”（野口雨情作詩、本居長生作曲）

本居氏が目黒不動のすぐ隣に住んでおり、月の夜この寺の境内を散歩しながら想を練った。歌碑は目黒区不動尊（目黒区下目黒3-24-6）、の本堂へ向う階段の麓にある「独鈷の瀧」の並び。傍らに記念碑建設実行委員会の立札。藤山一郎、五木ひろし、森昌子、高峰三枝子、

由紀さおり等の名が見える。

### 5. 赤い靴

“赤い靴はいてた 女の子 異人さんにつられて 行っちゃった…”

女の子の名は「岩崎きみ」。母親に連れられて北海道に。当時の開拓地の想像を絶する厳しさから、母はきみちゃん（3才）をアメリカ人宣教師の養女に出した。宣教師が帰国しようとしたとき、きみちゃんは不幸にも結核に冒され身体の衰弱がひどく、長旅にも耐えられないので東京永坂にあった鳥居坂教会の孤児院に預けられた（6才）。しかし薬石の効なく一人寂しく古い木造の建物の2階の片隅で九才の生涯を閉じた（明治44年9月15日夜）。母はきみちゃんがアメリカに渡り幸せを信じて亡くなった。母と子との愛の絆をこの像に託して（麻布十番商店街復興組合発行パンフレット）。

碑は都営大江戸線「麻布十番」駅、十番稲荷神社の出口前の大通を渡って直進100メートル。

### 6. たきび

“かきねの かきねの まがりかど たきびだ たきびだ おちばたき…”

碑によれば、作詞者、巽聖歌（たつみ せい）（本名野村七蔵 1905～1973）は、昭和五年、六年頃から約十三年の間、上高田四丁目に家を借りて住んでいた。朝な夕なにこのあたりの散歩をしながら、詩情をわかせた。

碑は新井薬師の近く、中野区上高田3丁目26。3方を道路に囲まれた1つの番地々区の周りを竹垣で囲んで独占し、天を衝くような樹齢何百年と思われる櫟の大木が林立した民家の一隅にある。本道から支道を70メートル入ったところに東向の門。その門に向って更に数歩真新しい竹垣の約一坪の区画。碑に寄添うようにけやきの若木が一本。散歩している人によるとその民家は鈴木兵衛氏の屋敷でこの辺りは地主が多く、鈴木氏もその1人とか。

### 7. 小さい秋みつけた

“だれかさんが だれかさんが だれかさんが見付けた…”（サトーハチロー作詞）

作曲家の中田喜直は自宅から近い井の頭公園が好きで、散策中にメロデーを思いついたという。白、黒の鍵盤が配列された鍵盤が碑の全長に亘って前方に張り出している。若し椅子があったら自分がピアノを演奏しているような気にもなる。鼻唄交じりに碑の前に暫し佇んでいる

中年の人々もチラホラ。(若いカップル連中には、知らぬ顔が多いよう。)

碑は井の頭公園弁天池の南側。中田さんが愛用したアップライトピアノをモチーフにしている。

## 8. 春の小川

“春の小川はさらさら流る 岸のすみれやれんげの花に...” (高野辰之作詞, 岡野貞一作曲)

碑によれば、この辺はかつて清らかな河骨川(こうぼねかわ)という小川が流れ、春になると岸辺にはれんげやすみれが咲くのどかな所で、代々木山谷(現代々木3丁目3号)に住んでいた高野氏はしばしばこのほつりを散策し、大正元年(1912)に上記の詩を発表した。現在川は暗渠となり、もはや当時のおもかげはないが明治末ごろの付近の様子を知ることができる、と。

小田急の参宮橋より代々木八幡駅に向かう下り線路添い、巾約1mの小道が本題の小川の跡。川は上記八幡駅南で初台川と合流、宇田川(現宇田川遊歩道)となって渋谷へ向う。碑は代々木5丁目65の小公園に建つ。

## 9. 花

“春のうららの隅田川 のぼりくだりの船人が...”

作曲者瀧 廉太郎(当時22才)が芸術的の歌曲の創造をめざし、東京音楽学校の友人や歌人に依頼して春夏秋冬の歌を作ってもらい、それに作曲した。碑は歓喜天を祀る浅草待乳山聖天(浅草7-4-1)と、隅田川右岸公園内の少年野球場との間の木立に建つ。

## 10. 浜辺の歌

“あした浜辺を さまよえば 昔のことぞ しのばるる...”

下記校の教師であった林古溪(作詞者)が友人の頼みで東京音楽学校の雑誌に作曲試作用として発表し、成田為三の曲が生き残った。

碑は文京区北学園内とされるが、現在、その地に無い。全学園が隣の東洋大学(箱根マラソンで有名)の付属校となる予定とのことで、目下校舎造成中。

## 11. 鉄道唱歌

“汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり...”

機関車と客車2輛との飾りを頂く碑には、作詞者大和田建樹が鉄道唱歌東海道山陽九州奥州他の五冊を連刊。就中「汽笛一聲新橋を」の一句に始まる東海道の部は普く世に流布して津々浦々に歌われた。実際に汽車に乗っての見聞録。

碑はお台場方面に行くモノレール「ゆりかもめ」の新橋出口に面し、JR新橋駅横浜側出口(汐留口)駅舎に接して建てられている。D51機関車の動輪の隣り。

## 12. からたちの花

“からたちの花が咲いたよ 白い白い花が咲いたよ...”

碑はするどいトゲの繁ったからたちの樹に囲まれ、上掲歌の発祥の地と刻む。北原白秋は郷里の福岡県柳川で小学校に通った小道のからたちの垣根をイメージして作詞。一方山田耕筈は印刷工場で苛酷な労働を強いられ、空腹に耐えかねて酸っぱいからたちの実を食べ、工場の職工に蹴られてからたちの垣根に逃げこんだ過去の経験をもとに作曲した(上笠一郎編「日本童謡事典」東京堂出

版)。碑は巢鴨教会(豊島区南大塚1-13、都バス「巢鴨小学校」下車)の庭隅に建つ。

## 13. 赤とんぼ

“夕焼小焼のあかとんぼ 負われて見たのはいつの日か...” (三木露風作詞)

東京あきる野市菅生、西多摩霊園管理事務所に面して左斜のとっつきにある、植木やしだれ櫻で囲われた一郭に作曲した山田耕筈氏の立碑と共に、歌詞碑が建っている。

この霊園の最寄駅はJR五日市線(中央線立川駅からの支線)秋川駅。JR線を南北に横断する滝山街道沿い、駅より北方約2キロ。駅から出る「小作行」バスで「若宮」下車。

## 14. こいのぼり

“屋根より高い鯉幟 大きい真鯉はお父さん...”

碑は八百屋お七で名高い駒込吉祥寺に入ってすぐの鐘楼とその右手の経蔵との間、2本の櫻に挟まれて建つ。

## 15. かもめの水兵さん

“かもめの水兵さん ならんだ水兵さん...”

作詞者武内俊子がハワイに旅立つ叔父を見送りに横浜へ行き、其処で見た鷗をヒントにこの詞を書いたとされる。碑は前記駒込吉祥寺の門を入れて約70メートル。「二宮尊徳」碑を左折。一番奥の五輪塔の手前。わかり難い。河村家之墓の一隅に建つ「河村光陽先生記念碑」に「童謡一路」と刻まれている。

## 16. からすの赤ちゃん

“からすの赤ちゃん なぜなくの こけこっこのおばさんに...”

碑は文京区音羽の護国寺。仁王門を入れて真正面に見える不老門に通ずる階段右下の水屋(手洗水盤)と本坊前に建つ富士道入口の鳥居との間の暗い木立の奥。隣に民謡碑、前に一億五千万年の木の化石「珪化木」(高さ約70センチ)。

## 17. 金太郎

“マサカリ カツイデ キンタロウ...”

碑は作曲した田村虎蔵が長くこの地に住んでいたのを記念して建立されたとのこと。神楽坂に近い新宿区筑土八幡町、築土八幡宮の正面、石の階段を上った左側。

## 18. 叱られて

“叱られて 叱られて あの子は町まで お使いに...” (清水かつら詩, 弘田龍太郎曲)

弘田は「くつが鳴る」、「雀の学校」など童謡や「浜千鳥」、「千曲川旅情の歌」などを作曲。享年60才。碑は地下鉄千代田線、千駄木、谷中墓地に向う「さんさき坂」沿いの全生庵の墓地にある。

## 19. 我は海の子

“我は海の子 白浪の さわぐいそべの松原に...”

(宮原晃一郎詞 作曲者不明)

今まで訪ねた碑の中で一番小さい。詩は文部省唱歌として第2次大戦後の音楽教科書にも採用された。碑は多摩霊園、宮原家の墓地(都立武蔵野公園に近い霊園の角地の18区1種21側54番。2坪位)にある。